

BLM と人種主義、植民地主義 ——『ブラック・ライヴズ・マターから学ぶ』を読んで——

BLM and Racism, Colonialism: A Bookreview for *Learning from Black Lives Matter*

中野 敏男
NAKANO Toshio

東京外国語大学名誉教授
Tokyo University of Foreign Studies, professor Emeritus

キーワード
植民地主義 人種主義 セクシズム インターセクショナリティ

Keywords
colonialism; racism; sexism; intersectionality

Quadrante, No.25 (2023), pp.11–19.

ありがとうございます。わたしのプロフィールは、基本は今ご紹介いただいたとおりなのですが、内幕を申しますと実は今回のためにはじめに書いた自己紹介文はすいぶん内容の違うものだったのです。でも、それがあまりに変わったものだったので、これじゃあ一般の人にはわからんということで山内さんにお叱りをいただいて、二回目に普通のものを書きました。どうしてはじめは違うものを書いたかと言うと、今から見ていただく動画に直接関係します。アメリカのブラック、とりわけ女性の文化ということになると、音楽が欠かせないと思うのです



図1：Strange Fruit を歌うビリー・ホリデー

ね。はじめの自己紹介文ではその音楽文化と関係させて自分のことを書いたわけです。それはひっこめたのですが、今日のお話しの方は、この曲を聴いていただくことから始めたいと思います。

(※「奇妙な果実」“Strange Fruit”の動画再生)

Strange Fruit

Billie Holiday, 1939

Southern trees bear strange fruit,
Blood on the leaves and blood at the root,
Black bodies swinging in the southern breeze,
Strange fruit hanging from the poplar trees.

(出典：

<https://www.youtube.com/watch?v=Web007rzSOI>)

歌の内容は特に説明しなくてもいいでしょうか。アメリカの黒人たちは、「奴隷解放」が宣言された後にも何かにつけずっとリンチを受け続けてきました。まあ「木に吊るされた」ということで、それが「ストレンジ・フルーツ」(strange



fruit)として表象されています。黒人はずっとそのように吊るされ続けてきました。その状況が現在でも本質的にはなお続いています。だからこそ、「ブラック・ライヴズ・マター」(Black Lives Matter, BLM)と叫ばれています。そのことを考えねばならないということです。

この歌は1930年前後につくられたものですが、動画で歌うビリー・ホリデーは1939年にこれをレコーディングしています。それを今から考えると、そんな早い時期にこういう内容の歌を歌ったというのはとても勇気がいったに違いないと想像できます。この歴史を踏まえ、そこから続く現在になお叫ばれているBLMについて、そしてそれを論じた本書の意味について、しっかり考えてみようというのが、今日のわたしの話しのテーマであります。

* * *

さて、まず本書の基本性格からですが、この本は、確かに東京外国語大学から出されるべきものだったとつくづく思います。と申しますのは、BLMを考える際には、意識すべき三つの焦点がおそらくあるだろうと考えるからです。一つ目は、その歴史的意味ですね。今申したように1930年代にStrange Fruitという歌ができて、それが現在の2020年代にBLMの形で受け止められているとすれば、そこにどのような歴史的意義があるのかという点です。二つ目は、BLMの思想的な成り立ち、この運動の構成というか意味の成り立ちを、どういう風に考えたらいいいのかという点です。それからもう一つは、それが世界に、アメリカを越えて世界に広がったこと、そのことの意味をどう考えるかということです。この三点ぐらいを考えてみる必要があると認めますと、東京外国語大学という大学は、こういうことをこそ考えるべき大学なのだ、とわたしは思うのです。そこで今日のお話も、これ

らの点について考えるというのがその中味になります。

このような話の構成は、私自身の関心に即して言えば、植民地主義とどう戦うかという問題に直接関連しています。ブラックの人々の生を根本的に脅かし、BLMという声が切実になった歴史とその思想は、世界の植民地主義の歴史と直接の連関を持っているのであり、この植民地主義に対して、理論的にあるいは運動として、どのように対決していくかという問題と密接不可分だと考えるのです。そこで、そうした植民地主義を意識した観点から、本書に書かれていることについて考えてゆきたいと思います。

* * *

荒さんのところ〔第1章〕から始めます。わたしはいつもキング牧師という言い方をしているのですが、荒さんはその人をキング・ジュニアと言われています。英語表記では確かにJr.がついていますからキング・ジュニアと言う方が文字通りなのでしょうが、1960年代の同時代に遠くから彼を見ていたわたしたちはいつも「キング牧師」という言い方をしてきましたので、ここでもそのように言いたいと思います。彼が牧師であったことを明示して考察するのもそれなりに意味があるだろうと考えます。その存在の歴史的意味を思考の基礎から考えるということを、荒さんの論考は問題としています。

キング牧師を世界的に有名にしたことのひとつは、“I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed.”と叫んだ、リンカーン記念堂前でのあの演説でしょう。ここで彼は、人々が自由で平等であるという信条は本当に現実化しうる「夢」なのだとして力強く語り、人々に大きな感動を与えました。確かに、その夢の語りは世界に広がり多くの人々に届きました。そのとき日本

にいた我々にも届いたわけです。

ところが、演説から60年が過ぎた2020年代の今日まで、本質的にはなお先ほど見た「ストレンジ・フルーツ」が語った暴力の現実と両立する夢のままに、それを引き留めてしまう力があります。それは何かということ、荒論考は問題として出しています。すなわちアメリカの黒人を、実は「不在のプレゼンス」とも言うべき位置に置き続けてきたその力のことです。それを明らかにしたものとして、トニ・モリスンの貢献が指摘されます。「不在のプレゼンス」というのは、白人優位の価値基準の下で価値をもたない存在として存在するということであり、それを支える白人の価値基準そのものを転倒させる役割をアメリカの黒人文学が果たしてきたということです。そこで特にアメリカの黒人女性であるトニ・モリスンの貢献は大きい。金髪碧眼という白人の美の基準にアメリカの黒人もまた支配されてきていて、黒人は、存在しながら白人の価値基準に従って自らの存在を否定し、その中で生きてきたのではないか。そのような自分たちの存在を否定する価値観の信奉ということ、トニ・モリソンは問題化したと言われています。そのようにして、見えない存在にされてきたアメリカの黒人を見える存在に転倒していきます。これが「黒人の命は大切」と主張するBLMの前提になっています。それゆえ、1960年代には夢として語られたそのことが、2020年代には現実の存在の自己主張となって現れているというわけです。1960年代と2020年代とがそのように対比されて、かつてとは違う位相に立つ黒人たちがBLMを叫ぶこの現在が見えてきます。荒論考は、この現在を非常に明快に教えていると感じました。

もっとも、そこで少し疑問に思ったことは、あの1960年代には他方で、「ブラック・イズ・ビューティフル」(Black is Beautiful)という運動、そうした声があったという事実です。その

時も「ブラック・イズ・ビューティフル」と言われていて、これも価値転倒に違いないはずです。そうだとすれば、その声とトニ・モリスンの貢献とはどう違っていただのでしょうか。その意味とか、深さとか、広がりとかにおいて、それらはどのように異なっていたのか。この点については、もう少し突っ込んで教えてもらいたいと思いました。それはともあれ、ここで言われる「不在のプレゼンス」という事態が核心的な問題であり、BLMがその歴史的な価値転倒を伴いながら現在生起しているということは、とてもよく分かりました。BLMにおいては、この価値転倒により、まさに「黒人の命は大切」と実際に心底から理解され主張されるようになっていきます。ここにこの運動の歴史的意味があるということです。

* * *

さて、本書が提起するもう一つの重要な論点は、人種問題とジェンダー問題との交錯を捉えようというところでしょう。それらとかく別々に考えられたり語られたりしてきた二つのことが重なり合っている、そういう交差点でBLMを理解する、あるいは、そういうふうを考えようとしている。それがとてもよく分かるところに、本書のもうひとつの大切な特徴があると、わたしは理解しました。

とりわけ小田原さんの論考〔第4章〕は、BLMの運動の成り立ちを社会構成の基礎から問うという議論になっていて、アメリカ社会を根底から規定する構造的な人種主義とジェンダー規範という観点からBLMを問題化しています。小田原さんはここで、黒人女性クレンショーの提起した「インターセクショナルリティ」という概念を受けとめながら、「黒人女性の経験を考慮しなければ、差別におけるセクシズムと家父長制、人種の相互作用は適切に分析し得

ない」(105頁)というふうに言われています。これは非常に重要な指摘だとわたしは思います。

しかも小田原さんの論考がさらに重要であるのは、そうしたインターセクショナル리티の作動が、理論的な構成においてだけではなくて、運動の成り立ちからしてもそう言えるのだと踏み込んでいくからです。BLMという運動は、ネット上に「ハッシュタグ #」のついた主張と情報が広がって、メディア的には「ハッシュタグBLM」(#BLM)と言われるようになり、それが運動を大きく広げたと見えて、今のメディア状況はすごいねという話にも繋がったりしています。しかし、実際に運動を広げた当の担い手の人たちに言わせると、そんなことで広がったわけではなく、この運動の広がり基礎にコミュニティの組織化ということがあって、実際にはそれが運動そのものを広げていると理解しなければなりません。小田原さんは、そのことにしっかり留意すべきだと主張されています。

「コミュニティの組織化というのは、多様な背景や経験を持つ人々を集めて、コツコツと自分たちの生活を変える面倒な作業」(99頁)なのであって、現実にはそういう作業の積み重ねを基礎にしてBLMなる運動も成り立っているということです。ここにBLMの思想としての特別に立体的な構成があり、それはまた、一過的ではなく広く定着して持続するこの運動の成り立ちでもあるという主張です。

このような思想運動の捉え方の変化は、そもそもそれが闘っている相手であるその思想についての見方にも、大きな転換を伴うことになります。レイシズムとセクシズムという思想のことですが、この立場は、これらが単なる意識の問題に、個々人の心の持ち方の問題に還元されてしまうことを拒否するのです。レイシズムとセクシズムというのは、単に個々人の意識の問題なのではなく、「様々な差別が交錯しつ

練り上げられた制度的・体系的なもの」(101頁)として社会的に存在する事象なのだという事です。そうだからこそ、これらとの闘いはコミュニティの組織化という社会的行動になるのであって、それは単なる観念上の情報の伝達や意識の啓蒙などとは異なっていると主張されるのです。ここには、BLM運動の思想的な成り立ちについて、とても重要な認識の進展があるとわたしは思いました。

こうしたレイシズムとセクシズムのインターセクショナル리티ということですが、そこで様々な差別が交錯するとはどういうことかをさらに広く問うて、それを現代世界認識にまで拡張したのが中山さんの論考[第12章]であると言うことが出来るでしょう。中山論考では、グローバル資本に支配されている「グローバル・サウス」(Global South)という問題が提起されていて、そこで、レイシズムとセクシズムだけでなく、人種、階級、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティ、国民、能力、年齢などをさらに包括的に含む様々な諸カテゴリーの交差にまで視野を広げてインターセクショナル리티の問題が議論されています。そこでは、様々なカテゴリーが相互に関連し、あるいはぶつかり合いもする、複合的なインターセクショナル리티の構造連関が捉えられるのです。

ところで、レイスとかジェンダーとかによる差別が問題となるときに、両者が複合する実際の局面では、そのどちらが主たる事態として優先的に問題化されるべきかという点で立場がぶつかり合うことがあります。場合によっては、それぞれのカテゴリーでのマイノリティ同士が互いに対峙し、時には権力者と同様の差別意識さえもって敵対しあうということもありうるでしょう。そんな時には、レイシズムとジェンダー差別とへの反対が相互に他方の問題を打ち消し合い、その狭間で両方のカテゴリーで劣位にある人々に固有な問題などは陥没して、両方か

ら消去されていくことになります。しかも現実のインターセクショナリティは、レイスとジェンダーの二次元で考えられるような単純なものではなく、階級や文化などを含め極めて多次元の複合的なものであるのですから、それを一身に背負ったマイノリティの問題は誰にも代表されることがなくなってしまう。中山論考においてとりわけ大切なのは、そんなインターセクショナリティの隘路をしっかりと明示し、それに対応して闘いを組織するBLMに学ぼうとしている点だと思います。

その基本は、人間一人ひとは、様々なカテゴリーに属しながら、それぞれ「固有の生」を生きているという理解です。だから必要なのは、そうした各人の固有の生を理解し、その一人ひとりを誰も取り残さないように努めることだとされます。それゆえにこそBLMは、集会などでも犠牲となった人々の名前を一人ひとりみんなと呼び、そのことで誰一人取り残さないという姿勢を明示し続けるという戦略的な態度を採っています。これに学ぼう、と中山論考はよびかけます。これはとても印象的でいいと思いました。

もっとも、一人ひとりが「固有の生」を生きているということですが、それが大切なのはそのどれもが等しく尊重されねばならない人間の〈生〉だからではないのかということがあります。だからここでは、〈人間の尊厳〉あるいは〈普遍的な人権〉の思想があらためて問われるだろうと、わたしは思います。固有の生を「等しく尊重する」といいますが、それではちょっと上から目線の言い方で、むしろ核になるのは誰にも等しく内在する〈人間の尊厳〉にみんなが同等に頭をたれねばならないという思想でしょう。そのように〈人権〉の思想を真に普遍的なものとして再獲得しようということ、BLMとはまさにそれを言っているのだとわたしは思います。この点はさらに深めねばならないでしょうが、ともあ

れこれが、BLMの思想的な成り立ちの普遍性であると考えていいのではないのでしょうか。

* * *

そこで、世界への衝撃というもう一つの論点に進みたいのですが、本書ではBLMと植民地主義批判の関係が語られていて、これは特に武内論考〔第15章〕において触れられています。「アメリカに端を発するBLMが世界、とりわけヨーロッパ諸国に広がったのは、奴隷制に由来する黒人差別への抗議運動がヨーロッパで進められている植民地主義見直しの動きと共振したからである」（344頁）と。それは重要な指摘だと思いました。

奴隷制と植民地主義とを関係付けながら解明するということは、近代資本主義の本源的蓄積過程として、奴隷制と植民地主義との歴史的意味をあらためて明確にして解明する一つの基本的な認識枠組みになると思います。その意味で、植民地主義批判を介してBLMは現代資本主義批判に深く接合する、とわたしは考えています。しかも、この点をしっかりと意識するとこの本の意味はもっと広がるはずで、ここではBLMのことを、さらに広く現代世界に広がりさらに深く現代社会に突き刺さる問題として少し敷衍して考えておきましょう。

* * *

広く知られているように、アメリカに始まったBLMは、ただちにイギリスに波及しています。それはこんなことです。イギリスのブリストルでBLMに触発されつつ黒人差別への抗議活動がはじまり、それをきっかけにして、この地で過去に行われていた奴隷貿易への批判が高まります。それで、この町の公園に建てられていた奴隷商人の銅像が川に投げ込まれるというこ



図2：エドワード・コルストンの銅像

とがありました。エドワード・コルストンのこの銅像です(図2)。この銅像が倒されて、川に投げ込まれたということです。コルストンとはどういう人かという、王立アフリカ会社の役員だった人です。この王立アフリカ会社は、1672年から1698年の間のアフリカ貿易を独占して奴隷三角貿易を行った商社で、1680年から86年の間に航海として240回、年平均5,000人を売買して、全体としては10万人を超える奴隷売買を行った会社です。コルストンは、これの役員だったのです。

だから、倒されるのは当然だというふうに考えられたわけですが、そこにさらに、コルストンの銅像一つを倒せばそれで済むことなのかという声が上がります。問題とされたのはブリストルという町自体のことです。これ〔図3〕は1768年に出版されたある地元新聞の奴隷売買広告です。“To be sold, A healthy Negro

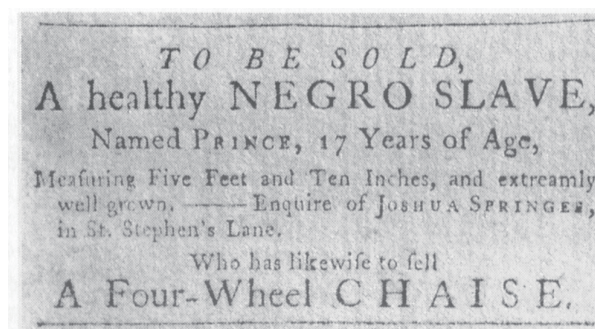


図3：地元新聞の奴隷売買広告（1768年）

Slave” というものですが、新聞に出たものですから、みんながこれを知っていたということです。つまり、コルストン一人がやっていたという話ではなく、こんな広告が新聞に出されて、それをみんなが知っていたということです。

そこで、こんな作品が作られます。トニー・フォーブスという人の作品ですが、「川を下って売られてゆく」というタイトルがつけられています〔図4〕。どういう作品でしょうか？ 首枷を握っているのはコルストンですね。コルストンの銅像です。ところが、ここにはもう少し描か



図4：「川を下って売られてゆく」
(トニー・フォーブス作、1999年)

れていて、(黒人奴隷の)身を縛るテープはポリスです。それから、船の帆は地元の新聞『イブニングポスト』と、地元のテレビ局 HTV。まあ17世紀にテレビ局はないでしょうから、これは現在のこと、現在に繋がる問題を見ているということです。それから公共放送局であるBBC。しかも吊り橋の上では、人々が囃し立てています、「わーいわーい」と。つまり、問題なのはコルストンだけではなくて、みんなが加担者なのということです。だから、コルストンのあの銅像をひとつ倒せば済むわけではないという話になります。

ブリストルという町は、グレートブリテンの中でも、マンチェスター、リバプールと、それからロンドンに並ぶ三大奴隷貿易の中心地で、しかも産業革命の中心地です。そこで、グーグルマップでブリストルの地図を参照し、「コルストン」を検索してみると、出てくる、町中いたるところにコルストンの名前がつけられているところがあると分かります。「コルストン・アヴェニュー」とか、「コルストン救貧院」とか、「コルストン学校」とか。学校、病院など、このような多くの公共施設にコルストンの名前が付けられているのです。この町でコルストンは実は慈善家として通っていて、だからこそさまざまな公共施設にその名前がつけられ、その銅像も建てられたということです。

とすればますます、銅像を、奴隷商人の銅像を一つ倒せばそれで済むという話ではなくなっていくですね。コルストンの名前がついたあらゆる施設について、その奴隷商人の名前をどうするのか、コルストンの名前を付けたままでいいのか、という議論が起こってくるということです。それで、名前の変更に動いた施設もあり、近頃に聞いたところでは、他方である女学校、ガールズスクールでは、すったもんだの議論の末に名前は変えないと決めたということです。それでも、変えるか変えないか、悩みはつきな

いようです。

このように BLM は世界に広がって、イギリスでは自らのかつてのそうした行為、とりわけかつての植民地での行為が問題となり、それが自分たちの現在にも繋がっていると理解されているということです。本書では武内論考で、アフリカあるいはその他の地域とヨーロッパとの関係が問われ、かつての植民地主義の問題が問われています。それは確かに、まずはアフリカ・アジアで何をやったかという問題ではありません。けれども、問題はそれに留まらないで、現在の、自分たちの生活そのものが問われるようになる、そういう批判が起こらざるをえないという構造になっている。BLM は、そのような広がりをもって進んでいるということです。

* * *

そこで、最後のまとめですが、BLM に触発されつつ現代社会とその意識の構成を広く深く歴史的・理論的に考えようとする際には、ここでも植民地主義という観点がとても重要だということにあらためて留意しておきたいと思います。先ほど触れたインターセクショナリティという問題をあらためて考え直しても、この植民地主義という観点の重要性を認めることができます。インターセクショナリティという問題を直視すると、現実にはそこでカテゴリー同士が対立しあうことがあると見えてきました。このとき植民地ないし植民地主義という概念は、そこで対立しあう諸カテゴリーとは基本的にレベルの違う位相を捉えていると理解することができます。どう違うかというと、人種、民族、階級、ジェンダー、エスニシティとかの諸カテゴリーが、それにより一定の人々の集合を指示する概念であるのに対し、植民地・植民地主義というのは、それ自体として何か特定の対象を指示するのではなく、支配-従属の関係、その従属状況そ

のものを表示する指標だということです。一定の地域を「植民地」と呼ぶにしても、それはなにかのカテゴリーに属するというのではなく、従属関係の下に置かれていること、あるいはそうした従属させる支配の作動があることを示しているということです。

このような植民地化、植民地支配ということの捉え方は、例えば「近代家族」を理解するときにもすでに重要な力を発揮することになっています。マリア・ミースは、近代家庭の中での主婦の存在、女性的主婦化ということについて、そこでの女性の従属を「植民地化」という概念を駆使して捉えました。近代家族というのは、女性を「主婦」としてそこに従属させ無償労働を強いることによって初めて成立します。これは経営としての資本の自立が可能になる基礎構造なのであり、それは資本による家族の「植民地化」と言うことができるというのが、マリア・ミースの考えです。これは資本主義の下で近代家族が置かれている状況を一般化的な概念でとらえる理論的試みなのです。

これに学ぶなら、BLMが告発する現代世界に黒人が置かれた状況を概念化するに当たっても、「植民地主義」という概念が極めて適切であるということがよく分かります。近代資本主義の成立にあたって、黒人奴隷制とそれを支えた植民地支配が不可欠な本源的蓄積をもたらしたことは明らかですが、それに始まる近代社会の成り立ちそのものにレイシズムとセクシズムが不可欠な構成要素になっています。この事態は、まさに「植民地主義」という概念によってこそ最も適切に解明されるということです。BLMに触発されながら、現代世界のレイシズムとセクシズムの解析に取り組んだ本書の諸論考は、極めて明確にこのことを示してくれていると、わたしは理解しました。

そのように植民地主義をもって従属を強いる現代社会に尊厳を奪われ続けてきている黒人

女性たちは、BLMの始まりよりずっと以前から声を挙げて、従属を強いられたその経験を訴え、自ら尊厳の回復を求め続けてきました。そこでわたしの発言の最後に、既に半世紀を超えて表現され続けてきたそんな声の一つにあらためて耳を傾け、その意味を噛みしめておきたいと思います。

(※「リスペクト」“Respect”の動画再生)

Respect

Aretha Franklin, 1967

(Ooh) What you want
(Ooh) Baby, I got it
(Ooh) What you need
(Ooh) you know I got it
(Ooh) All I'm askin'
(Ooh) Is for a little respect
when you come home (just a little bit)
Hey baby (just a little bit)
when you get home
(Just a little bit) mister

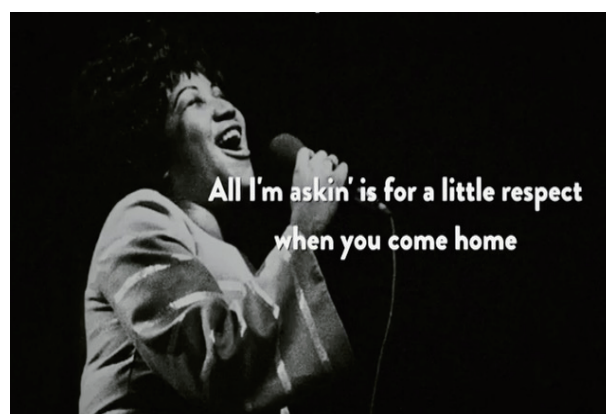


図5：Respectを歌うアレサ・フランクリン

(出典：

https://www.youtube.com/watch?v=A134hShx_gw)

この黒人女性の声が求めているのは、ほんの少しのリスペクト (respect) だけだということです。この「リスペクト」という歌はアレサ・フランクリン (Aretha Franklin) が歌ったものです

が、ここで少し紹介しておきたいのは、『Rolling Stone』という代表的なロック専門雑誌がロックの歴史に残る500曲をランキングしていて、この歌がなんとその第一位に選ばれたということです。ビートルズやローリングストーンズなど大スターたちの楽曲をおさえて、この「リスペクト」こそがロックの歴史に残る第一位だと認められたのです。この歌は、それだけ評価を受け、それだけの影響力を持ってきたというわけです。これは1967年にリリースされた歌ですが、これまで考えてきた植民地主義の問題と、それと関連する黒人女性の「リスペクト」への切実な要求を思えば、現在にいたるその歌の高い評価の持続は今日のBLMと黒人女性の問題を考える上でたいへん重要な意味をもつ事実であると、わたしはあらためて感じました。以上です。